

Ⅲ 古賀智敏先生を偲んで

古賀智敏先生を偲んで

米山 正樹（国際会計研究学会会長・東京大学）

旧年 5 月、古賀先生の訃報に接した際、私はしばらくこの知らせを信じることができませんでした。というのも、同年 8 月に予定されていた第 42 回研究大会（於神戸学院大学）において古賀先生が特別講演をお引き受け下さった旨、大会準備委員長である島永和幸先生より連絡を受けており、会員のひとりとして古賀先生のご講演を楽しみにしていたからです。訃報が疑いようのない事実であることを知ったとき、私は言葉を失いました。

古賀先生の国際会計研究学会に対するご貢献は多岐にわたっています。紙面の制約の中では、それらをひとつひとつ列挙することは叶いません。古賀先生のご貢献の中で、会員のみなさまの多くにとって印象深いのは、現在にまで続いている韓国国際会計学会 (Korea International Accounting Association : KIAA) との交流協定を締結なさったことでしょう。いまでは IASB および ISSB の基準開発活動に資する経験的な事実を提供するためのプログラム（通称 IASB/ISSB 支援プロジェクト）が存在するものの、長きにわたり、私どもの学会は、「国際」という名称を付していながら、法域外の学会との提携・連携としては KIAA との関係が唯一となっていました。今日、国際的な活動の活発さに依存して学会が評価されている事実を鑑みますと、古賀先生の先見の明には敬服するばかりです。

私は、一昨年 9 月より会長職に就いております。理事の先生方はどなたも協力的で、ストレスを感じることなく会務を進めておりますが、それでも学会としての大きな意思決定に際しては意見対立が生じ、その解決に頭を悩ませることがあります。長期的なコミットメントが求められる KIAA との交流協定を締結する際、古賀先生はおそらく、私がこれまで直面してきたものよりはるかに大きなコンフリクトを解消する必要に迫られていたことと拝察します。対立している考えをどれも正論とみなしうる中で、誰もが納得する着地点を見出された古賀先生のリーダーシップを見習いたいと心から願っているところです。

個人的な思い出となりますが、日本会計研究学会の太田・黒澤賞を受賞したとき、私は会長付幹事を務めていました。幹事として理事会の準備を進めていたとき、当時理事でいらっしゃった古賀先生から「おめでとう」と声をかけていただいたときのことを今でも忘れられません。主題やスタイルにおいて古賀先生と異なっている私の研究も公平に評価して下さった古賀先生の懐の深さを思い出しているところです。こうした懐の深さゆえ、古賀先生の研究室からは多くの研究者が輩出されています。そのうちのおひとりである岡本紀明先生は、今年度の JAIAS 学会賞（著者の部）を受賞されました。古賀先生の学風が受け継がれ、時代と環境の変化に合わせてさらに発展していることを先生はお慶びになっていることと存じます。末尾となりますが、古賀先生の学会に対するご貢献に改めて感謝するとともに、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

古賀智敏先生を偲んで

河崎 照行（国際会計研究学会元理事・甲南大学名誉教授）

2025年5月5日、本学会の第11代会長であった、古賀智敏先生がご逝去された。突然の訃報であった。わが国の会計研究・会計教育を長年牽引してこられた先生は、私にとっては盟友であり、神戸大学大学院・武田ゼミの先輩でもあった。

武田ゼミでの思い出

古賀先生との出会いは、1980年代の初頭であった。武田ゼミの総領弟子であり、先輩ではあるものの、私が武田ゼミに在籍した頃、先生は武田ゼミを卒業され、米国で公認会計士の業務に就かれていた。したがって、武田ゼミで一緒に学んだ経験は無い。

親しいお付き合いが始まったのは、1982年に米国から帰国され、龍谷大学に奉職されてからである。古賀先生の再就職に尽力されたのが恩師の武田隆二先生であった。古賀先生は、「武田先生の期待を裏切り、実務家の道に進んだ自分を、先生は温かく迎え入れてくれた。感謝しても感謝しきれない」といつも言っておられた。

会計学界で、古賀先生と私は、武田先生の「助さん・格さん」と称された。それ程、武田先生と私たちはいつも一緒に行動し、深い絆で結ばれていた。古賀先生と私は、何とか武田学説を超える研究成果をあげたいと、二人で切磋琢磨した。しかし、その研究スタイルは異なっていた。古賀先生は、武田学説にはない新たな研究分野の開拓を指向し、私は武田学説の継承を指向した。

古賀先生の優れた研究業績

古賀先生は、ファイナンス型会計理論やナレッジ型会計理論で、多くの優れた研究業績を残されている。先生の会計研究の出発点は会計監査であり、『情報監査論』（同文館出版、1990年）で日本公認会計士協会学術賞を受賞された。その後、ファイナンス型会計理論の力作である『デリバティブ会計』（森山書店、1996年）で日本会計研究学会太田・黒澤賞を受賞されている。また、『価値創造の会計学』（税務経理協会、2000年）や『知的資産の会計』（東洋経済新報社、2005年）といった著作では、ナレッジ型会計理論の新たな研究分野を開拓され、常にわが国の会計研究をリードしてこられた。

さらに、会計教育では、次代を担う10名超の有能な門下生を育成され、古賀学説はわが国会計学の大きな潮流として継承されている。

研究活動の思い出

古賀先生とは、よく談笑し、よく喧嘩もした。武田先生から厳しい指導を受けたときなど、「おれはおまえがいなくてダメなんや」と、泣き言をいわれたこともあった。しかし、私が本務校の管理職で忙殺されていたとき、容赦なく過酷な研究課題を割り当ててこられた。研究室での泊まり込みの生活を強いられたときなど、恨みに思ったこともあった。しかし、今日、曲がりなりにも研究

活動を続けられているのは、兄弟子としての厳しい指導のお陰に他ならない。

古賀先生は原稿を脱稿すると、必ず私に電話をかけてきた。脱稿され、ホッとされたのであろうが、私には大きな迷惑であった。仕事を中断され、しばし、四方山話につきあわせられ、最後に、「邪魔したな。おまえも頑張れ！」とあって、電話を切られる。「ゴーイング・マイ・ウェイ (Going My Way)」そのものであったが、憎めなかったのも人柄であろう。

海外出張・留学の思い出

古賀先生は、米国、英国、ドイツ、オーストラリア、中国など諸外国の調査研究に連れて行ってくれ、私に調査研究のノウハウを教えてくれた。米国では、ニューヨークのウォール・ストリートを一日中、歩き回ったことがある。会計事務所で研究課題の会計・監査関係の資料の紹介を交渉し、不可能と分かると早々に調査を切り上げる。米国での実務経験を駆使した、実に効率的な調査研究であった。オーストラリアでは、書店まわりをして、IT 関係の最新の文献を入手し、わが国に紹介したこともある。ドイツでは、武田先生の恩師であるヴェーエ教授（ザールランド大学）の古稀の祝賀会に参加し、ライン川の川下りを楽しんだことも懐かしい。

私の留学先を紹介してくれたのも、古賀先生であった。当初、南カリフォルニア大学に留学先が決まっていたが、カリフォルニアで暴動が発生し、初めての家族との海外生活に不安を感じていた。その折、古賀先生がテキサス大学（オースチン校）を紹介してくれた。古賀先生と懇意であったロバートソン教授ご夫妻の心温まるお世話で、家族ともども、快適な留学生活を送ることができた。留学中には、テキサスまで、我々家族の様子を見にきてくれた心優しい先輩であった。

古賀先生との別れ

古賀先生はいつも私に、「おまえの弔辞は、おれが読んでやる」とよく憎まれ口をたたいていた。人生は皮肉である。いま、私が先生を偲ぶ文章を認^{したた}めている。

虫の知らせだったのだろうか。2025年1月中旬に、職業会計士団体の賀詞交歓会で、たまたま隣り合わせの席に坐わり、久しぶりに、四方山話をする機会があった。古賀先生「これから、研究書をまとめたいと思っている。おまえも書け！」。私「もう、エッセイ集を書いた。余計なお世話だ！」。それが最後の会話であった。

古賀先生は、干支（イノシシ歳）のままに、猪突猛進で駆け抜けた生涯であったように思う。奇しくも享年77歳は武田先生と同じであった。

心より、ご冥福をお祈りしたい。

古賀智敏先生が次世代に残してくださったもの

山口 峰男（東洋大学）

古賀智敏先生の突然の訃報に接し、深い悲しみに言葉を失っております。先生が病に倒れられるひと月前の2024年12月25日クリスマスのことでした。露^{つゆ}ほどとも想像しておりませんでした。それが私にとっては先生からご指導をいただく最後の機会となってしまいました。先生を偲ぶにつけ、あの日のお姿が、そして私たちに残してくださったお言葉が、まるで昨日のここのように、いっそう鮮明に胸に蘇ります。

それは、2007年から続いているある研究会において、かつての指導学生の方に熱心に語りかけておられた光景です。

先生は、かつてある方の著書が不当な評価を受けそうになった際、毅然とこう仰ったそうです。「『学位論文をまとめたものに過ぎない』などと言うが、失礼ながら、あなたはこの本が書けますか、とね。そう申し上げたのですよ。テーマはそう簡単ではないのです。」

その時のことを語る先生の横顔に、私たち後進一人ひとりに対する深い愛情と、教育者としての揺るぎない信念を改めて感じ、胸が熱くなりました。

そして、先生はその方の未来を想い、ご自身の言葉で「守りの経営」と「攻めの経営」という比喩を用い、私たちの進むべき道を示してくださいました。

先生は、まず既存の学問を補い、環境の変化によりバージョンアップしていく「守りの経営」の重要性に触れながらも、その眼差しに鋭い光を宿し、こう続けられたのです。

「ですが、その『守り』の世界だけでやっていくには、もう時代が違う。何より、私にはね、『守りの経営』、既存の延長線上では面白くないのですよ。」

その真っ直ぐな言葉に、私は思わず息を呑みました。そして先生は、いたずらっぽく笑みを浮かべられ、こうおっしゃいました。

「『攻めの経営』とは全く違う分野の知識を加えて、これまでになかった新しい価値観や知識体系、アイデアを創り出す。問題はアイデアです。だから一度、これまでやってきたことは忘れてください。ずっと忘れられては困るけれどね。リフレッシュが必要です」と、私たちの背中を力強く押されました。

圧巻だったのは、その具体的な道筋として社会学の「トラスト（信頼）」というアイデアを挙げられた時でした。

「他の領域の学問でこれほど研究の成果の蓄積があるものが、会計学ではまだ発掘されていない。これぞね、まさしく宝の山。宝物は意外と足元にあるものなのですよ。」

そう言って目を細められたお顔は、秘密の宝の地図を見つけた少年のように輝いていました。

そして先生は、その地図を一枚一枚めくるように、「トラスト」と会計学の繋がりを鮮やかに解き明かしていかれたのです。

「企業に色々な問題があってそれについての社会的信頼性を経営者が発信しようとしている、それを『トラスト』とみれば、アカウンタビリティとの接点もできる。」

さらに先生は、かつて井尻雄士先生が会計学を『評価論』から『測定論』へとパラダイムを転換された歴史に触れ、

「単なる『会計』という領域から、『社会科学としての会計』の領域へということ。同じようなことが、今度は『測定論』という観点から、つまり『トラスト』という言葉から社会科学のなかでこれを活かす、それを通じて広がるのではないかと思います。」

と、私たちに優しく語りかけるように、しかし熱っぽく壮大なビジョンを説かれました。

クリスマス当日に行われたその研究会の空気は、まさに歴史の転換点に立ち会っているかのような、荘厳なものでした。先生が示してくださったこの新しい学問の地平は、単なる一研究テーマの提示をはるかに超え、私自身の生涯を懸けて追い求めるべき大きな光となりました。

あの時、先生が目を細めて語られた一つ一つの言葉を、今、改めて反芻しております。当時は、これが最後のご指導になるとはまったく想像しておりませんでした。しかし、突然の別れを突きつけられた今、あのご教示のすべてが、私たち次世代を担うべき者へ託された「遺言」であったのだと、痛切に、そして固く受け止めております。

古賀先生、先生が蒔いてくださった知の種は、今、私たちの心の中で確かに息づいています。先生の温かい笑顔と、厳しさの奥にあった深い愛情を、私たちは決して忘れません。先生への何よりの恩返しは、教えていただいた「攻めの経営」の精神を忘れず、学問の道に精進していくことであると信じております。

これまで賜りましたご厚情に心より感謝申し上げますとともに、謹んでご冥福をお祈りいたします。どうか、安らかにお休みください。

古賀 智敏先生を偲んで

與三野 禎倫（国際会計研究学会理事・神戸大学）

我々会計学を志す者の道を常に照らし、導いてくださった古賀智敏先生が、2025年5月5日、享年77歳をもちましてご逝去されました。生前の先生とご縁のあった学友を代表し、ここに謹んで哀悼の意を表します。

先生と初めてお目にかかりましたのは、私が神戸大学大学院の門を叩いた1997年の入学式でのことでした。私は櫻井久勝先生のゼミに所属していましたが、研究室の同輩が古賀先生のゼミ生であったご縁から、入学式の当日に研究室へご挨拶に伺う機会に恵まれました。

先生は、1996年に名著『デリバティブ会計』（森山書店）を刊行された直後で、新たな金融環境

に対し会計学がいかに応答すべきかという課題に、果敢に挑んでおられた時期でした。先生の常に未来を見据えたその研究姿勢は、私たち後進を強く惹きつけるものであり、その穏やかで包容力のある笑顔とともに、研究者としてのあるべき姿、その先駆を示してくださる存在でした。

幸運にも、翌1998年には社会人MBAコースでティーチング・アシスタントを務めさせていただくこととなり、先生の研究室でより多くの時間を共に過ごさせていただく機会を得ました。そのご縁が繋がり、2004年には先生が率いられた神戸大学大学院経営学研究科の国際会計ユニットに教員として採用いただくという望外の喜びを得ました。以来、2025年に至るまで28年という長きにわたり、公私にわたって温かいご指導を賜りました。

先生がご著書『デリバティブ会計』の序文に「本研究を始める『きっかけ』を作ってくださったのも武田先生であった」（序3）と記されているように、その学問における先駆性は、故・武田隆二神戸大学名誉教授の薫陶の賜物でありました。

先生は生涯にわたり武田先生の門下生であることを自認され、その教えを忠実に守りながら、研究活動に邁進しておられました。恩師である武田先生が2009年に奇しくも同じ77歳でご逝去されるその時まで、その姿勢に揺らぎはありませんでした。

当時まだ新しい領域であったにもかかわらず、『デリバティブ会計』の礎となった雑誌連載（実務講座）を全20回にわたり成し遂げられたのも、ひとえに先生の研究に対するその真摯な姿勢の表れと言えましょう。その姿勢は、龍谷大学にご在職の頃から紀要に毎号欠かさず執筆されることを自らの務めとされていたことにも、よく表れています。その学究へのひたむきな姿勢には、ただただ敬服するばかりです。

先生の先駆的な研究は、さらに2005年のご著書『知的資産の会計』（東洋経済新報社）において結実します。

当時、筆者も先生のもとで研究の機会をいただいておりますが、このご著書は、先生が2003年より着手された「21世紀の新たな知識創造化社会に対応したナレッジ型会計」という研究領域から生まれたものでした。先生はその研究成果を本書へと昇華させるに留まらず、複数の英文論文を執筆されるなど、精力的にその成果を世に問われました。

先生は、1990年代末より北欧で知的資本会計が発展していたことにいち早く着目され、スウェーデン・ウプサラ大学のウルフ・ヨハンソン教授をはじめ、デンマークの主要な研究者らと緊密な協力関係を構築されました。こうして築かれたイギリス、オーストラリアを含む国際的な研究ネットワークは、我々後進にとって大きな財産となっています。

筆者自身、現在もスウェーデン、デンマークの研究者と共同研究を推進できるのは、ひとえに先生が築かれた礎の賜物であり、その恩恵を深く実感しております。一冊の著書に留まらず、国際的な学術ネットワークの構築へと展開されたその鮮やかな研究手腕は、我々後進が目指すべき理想の研究者像を雄弁に物語っています。

古賀先生は2011年9月から2014年8月までの3年間、国際会計研究学会の会長を務められ、2017年にはそのご功績を称えられ学会功労賞を受賞されました。

僭越ながら、会長ご在任中の3年間にわたり事務局長としてお仕えし、先生の学会運営に対する

お姿に間近に接する機会を賜りました。その際に抱いた偽らざる実感は、古賀先生ほど国際会計研究学会の会長という重責にふさわしい方はいらっしゃらないのではないかと、いうものでした。

先生は 1971 年のイリノイ大学へのご留学、そして大学院ご卒業後、1980 年まで米国の大手会計事務所（クーパーズ・アンド・ライブランド会計事務所（現 PWC）、アーサー・ヤング会計事務所）でご勤務された豊富な国際経験をお持ちでした。そのご経験に裏打ちされた流暢な英語と国際会計に対する深い見識をもって、我が国の国際会計研究を、会長ご在任中はもちろんのこと、ご退任後も力強く牽引してこられました。そのご功績は、先生の輝かしい業績リストに記されたものだけでは到底語り尽くせるものではなく、我々後進一人ひとりの心に深く刻み込まれております。

精力的に研究活動に打ち込んでこられた先生の情熱は、後進の研究者育成に留まらず、広く次代を担う者への教育にも注がれました。神戸大学をご退任された後も、同志社大学、東海大学（副学長）、そして金城学院大学と教鞭を執り続けられ、その熱意が衰えることはありませんでした。ご親族からは、ご病を押してなお、教壇に立ち続けようとされていたと伺っております。また、近い方々からは、研究の集大成を成し遂げようとされていたともお聞きしました。

先生が最期の瞬間まで貫かれたその真摯な学究姿勢を、我々後進は受け継いでいけるでしょうか。ご病気が見つかったから、あまりにも早い先生のご逝去が、ただただ残念でなりません。叶うことなら、先生と教育や研究について、もっと語り合いたかった。これが、先生を慕う我々一同の偽らざる気持ちです。

今も、先生のあの朗らかで、それでいて物事の本質を見抜く鋭い眼差しが、私たちを励ましてくれているように感じられます。そして、常に国際的な世界観から現実の経済と企業を論じてくださったその研究眼を、我々後進もしっかりと受け継いでいく所存です。

古賀智敏先生、どうぞ安らかに眠りください。

先生から薫陶を受けたすべての者を代表し、謹んで哀悼の意を捧げます。

恩師 古賀智敏先生を偲んで

仙場 胡丹（国際会計研究学会理事・名古屋大学）

2025 年 5 月 5 日、恩師 古賀智敏先生の突然の訃報に接し、強い悲痛と喪失感に浸った。近頃いつもかかってくる電話が鳴らないと気になっていたところだった。ここにて日本会計研究・教育・制度を長年にわたって牽引した恩師の永遠の旅立ちに、弟子で学界人のひとりとして様々な場面での思い出を記しながら追悼いたします。

古賀智敏先生と初めて会ったのは、1997 年の夏であった。当時私は広島県立大学経営学部の 3 年生で、古賀先生が集中講義の非常勤先生を務められることから広島県立大学の所在地の広島県庄原市に 3 日間いらっしゃった。古賀先生当時新著の『デリバティブ会計』（日本会計研究学会太田・黒澤賞）を教科書として教えられた。その頃、古賀先生が 40 代だと計算されるが、快活な雰囲気であり、ユーモアなセンスがにじみ出て、学生に難解なデリバティブ取引について、わかりやすく教えられた。庄原市は人口 2 万人の小さい町で、広島県立大学は、さらに、庄原市中心からバスで

20分の距離にある所にあり、3日間では何も娯楽ができないではないかと思ひ、校内の体育館で夕食後の学生たちとのバドミントンにお誘ひしたところ、快諾してくださり、バドミントンを皆さんと一緒にやったことは昨日のように思ひ出される。古賀先生との1997年の出会いは、のちに私が神戸大学を進学先として選択したことに決定的な要素となった。その後、古賀先生を指導教官として希望して入学手続きを取り、入試に臨んだ。神戸大学への大学院進学は、私の学者への道の第1歩であるとするれば、古賀先生は、その道を示してくださった恩師である。

古賀先生は、神戸大学大学院経営学研究科修士課程修了されてから、1974年9月ミシガン州立大学経営大学院MBAプログラム留学され、1976年8月イリノイ大学経営大学院会計学修士を取得され、アメリカで1982年まで会計士として会計士事務所などで勤務された。1982年4月から日本に帰国され、龍谷大学で助手・講師・助教授・教授として務められ、1994年4月より神戸大学経営学部教授として着任され、2010年3月神戸大学を退職されたのち、同志社大学特別客員教授（2010年4月～2015年3月）、東海学園大学教授（2015年4月～2023年3月）（2017年4月から研究科長・経営学部長、2019年4月から副学長）を務められた。2025年4月から金城大学教授でいらっしやり、生涯現役であった。

古賀先生との出会いは、ちょうど先生が神戸大学に着任されて3年目の夏で、思えば、古賀先生のグローバルなご活躍がその出会いの背景を作り、当時の留学生としての私に気をかけてくださったと思われる。

神戸大学院時代の古賀先生ゼミには、多くの院生や関係者がいた。古賀先生が国内外からの学生を受け入れ、身分も様々だった。国内外からの研究生もいれば、文部科学省から奨学金を受給されたアフリカ人大学院生もいた。日本で調査をするために、古賀先生に一時的にサポートをしてもらった外国人もいれば、しばらく古賀先生とともに研究するため、タイやドイツからも研究者がたびたび訪れた。国際的な研究集会も開催され、たとえば、**The International Journal of Accounting**のシンポジウムを神戸大学で開催されたのである。院生たちとよくコミュニケーションした。山の上にある神戸大学の正門から山の中腹に下るところにある軽食レストランでよく（ミートソース）パスタやケーキを御馳走になった。また、ふもとの居酒屋さんも院生らとワイワイしながら、よく通った。実は古賀先生があまり飲まない（グラス1杯ビール飲めるか否かの分量しか飲めない）のであるが、院生たちには食事をよく勧めていた。私が教員になってからよく思うのだが、古賀先生があれば頻りに院生たちと食べて交流していたことに驚嘆する。各国からの院生たちのお話に耳を傾けていらした。

古賀先生は会計学の発展のために教育活動にも熱心でした。私が大学院生時代に **Teaching Assistant** も勤めたことから身近で見ましたが、学部生に具体例を示しながら、説明するのが好きで、学部の講義が熱気に包まれた。私が勤めている名古屋大学にも2回ほどいらっしやり、大勢の学部生に講義をされ、熱心に取り組んでおられた。

古賀先生の学界や学術的な貢献は数えきれない。日本簿記学会理事；日本会計研究学会の評議員・理事、税務会計研究学会理事を歴任され、国際会計研究学会理事を2008年9月～2017年8月に務められ、2011年9月～2014年8月に国際会計研究学会第11代会長、2017年9月から国際会計研究学会顧問を務められ、学会功労賞を授与された。学会賞等審査委員も長きにわたり、務めら

れ、日本会計研究学会賞及び太田・黒澤賞審査委員を2003年～2006年；2009年～2015年、国際会計研究学会・学会賞審査委員を2008年～2010年に務められた。科研費の獲得も顕著であった。基盤研究Aを2回、Bを2回、挑戦的萌芽研究を2回代表として獲得され、古賀先生の学術的前進性、先駆性、実績の数々枚挙にいとまがない。先生の単著の著作だけでも7つある。『情報監査論』（日本公認会計士協会学術賞）、『デリバティブ会計』（日本会計研究学会太田・黒澤賞）などであり、英語で書かれた『Japan GAAP Guide』は国際的に日本GAAPを世界に紹介できるものである。

弟子のひとりとして古賀先生の身近にいることで大変学術的な薫陶を受けており、また大学院在学中には直接学術的なご指導をいただいたのはいうまでもない。先生がひとつの研究を始めるのにあたり学問的重要性を先に問うようにしており、その考え方は、私自身が教員になってからもよく用いた。また論文の書き方や文章の流れについてもご指導をいただいた。古賀先生の達筆で流れるようにお書きになった手稿を読むのに、「解説」技術が必要で、弟子たちで解説していたことが懐かしい思い出である。大学院を修了してから教員になっても、古賀先生からの指導が滞ることがなかった。古賀先生が主宰される研究会で定期的集まり、先生からのご指導を受けたり、時々電話にて様々なことについて相談させていただきました。2024年国際会計研究学会研究大会での選挙で私が理事に選ばれたときに、古賀先生から電話口で、「これから日本会計研究、国際会計研究のために共にやりましょう」という言葉が忘れられない。

弟子のひとりとして、古賀智敏先生を失ったこと、胸に穴が開いたような強い悲痛である。古賀先生は教育者・研究者として多くの実績を残し、弟子たちの今後の活動にも教育者としての糧を残した。古賀先生のこれまでのご功績を偲び、ご指導に深謝するとともに、謹んでご冥福を心からお祈り申し上げます。

古賀智敏先生を偲んで—ご功績とお人柄

岡本 紀明（国際会計研究学会理事・立教大学）

古賀智敏先生が去る2025年5月5日に不帰の人となられた。私の師匠であり、数十年にわたり我が国の国際会計研究を牽引してこられた。古賀先生の存在がなければ、私は研究者になれておらず、人生の恩師でもある。先生の鋭い洞察に基づくご研究や教えを、これからも引き継いでいきたい。

■ 古賀先生のこれまでのご研究

古賀先生の研究業績は、財務会計、税務会計、監査など多岐にわたるが、最初の著作は『情報監査論（同文館出版）』であり、日本公認会計士協会学術賞を受賞している。この背景には、先生が研究者になられる前に米国の大学院（ミシガン州立大学及びイリノイ大学）で学ばれ、現地の監査法人で米国公認会計士として監査実務の経験を積まれていたことも影響している。その後、先生は会計ビッグバン以前から金融商品会計を研究され、その研究成果は『デリバティブ会計（森山書店）』

に結実し、日本会計研究学会太田・黒澤賞を1996年に受賞されている。本書は、当時我が国で脚光を浴びつつあったデリバティブに関して、その会計的認識・測定・開示を体系的に理論化しており、当時の制度設計や研究の進展に大きく貢献したのは言うまでもない。

その後、先生の研究のご関心は会計基準のグローバル化の問題へとシフトする。当時の日本の会計基準が欧米諸国のグローバルな基準とは異なっていたため、海外の動向に常に目を配られていた古賀先生は、この問題には人一倍の熱意を持たれていた。『会計基準のグローバル化戦略—国際会計基準の導入と会計基準の調和化への対応（森山書店・五十嵐則夫先生との共著）』や『グローバル財務会計（森山書店）』といった著書を出版されるのみならず、学会活動にも積極的に参画され、2011年から2014年には国際会計研究学会会長を務められた。その功績を讃えられ、2017年度には国際会計研究学会功労賞も受賞された。

最近の古賀先生のご研究の中心は、無形資産（特に知的資産）会計であった。常に社会及び経済の変化を敏感に感じ取り、研究に反映されていた先生は、企業の競争優位性の源泉が知的資産に移行している点をいち早く認識されていた。その精力的な研究の成果は、『知的資産の会計—マネジメントと測定・開示のインターアクション（東洋経済新報社）』や『知的資産ファイナンスの探求—知的資産情報と投資・融資意思決定のメカニズム（中央経済社）』に結実し、その認識・測定の枠を超えて、『統合報告革命—ベスト・プラクティス企業の事例分析（責任編集、税務経理協会）』や『企業成長のデザイン経営—知的資産の創造的利用、イノベーションと事業性評価（同文館出版）』といった著作も手がけられた。また、2011年には会長として「日本知的資産経営学会」を設立され、学会自体は会計学者のみならず経営学者や実務家を巻き込んで現在も拡大している。

このように、古賀先生のご研究は、時代の変化とともに、それぞれの分野で顕著な業績として光り輝いてきた。社会の行く末を常に先取りされ、先見の明を持たれて現在の問題意識は何か、また必要な会計理論は何かを識別されつつ、短い時間で研究を進めて次々と著作を発表されるそのエネルギーは、全く衰えることがなかった。

■ 古賀先生のお人柄

昨年の5月初旬、古賀先生の悲報に接し、まさかと時間が止まった。一昨年末に忘年会と出版打ち合わせを兼ねて、神楽坂での会食にご一緒させて頂いていたからである。その時には凄くお元気に見え、お酒も召し上がられていたから、余計に驚いた。

大学院生時代のご指導は厳しいものがあったが、就職した門下生には温かく、深い慈愛に満ちあふれた先生であった。大学院生時代は、何度食事をご馳走になったか数え切れない。弟子の喜びを我が喜びとし、門下生の活躍を誰よりも喜んで下さった。不肖の弟子ながら、師匠の喜ぶ顔を見るのが嬉しく、それが研究活動の一つの原動力になっていた。もうその笑顔を見るための報告ができないと思うと、胸が詰まる思いである。

冒頭で古賀先生は私の研究者人生を決定付けたと記したが、それにまつわるエピソードを紹介したい。古賀先生を大学院の指導教官として選び受験する際、私は事前に一切研究室訪問もせず、メールでのコンタクトも行わなかった。自分の専門知識が浅はかで自信がなかった点は勿論のこと、大学院への出願前に地元の銀行への就職が内定していたからである。両親も将来どうなるか分から

ない大学院での研究生活に賭けるより、(当時は今よりも安定していると考えられた) 銀行への就職を推しており、就職氷河期の最中というのもあって、自分自身も将来の進路に迷っていた。

大学院入試の合格発表直後、携帯電話が鳴った。知らない番号であったが出たところ、「神戸大学の古賀です。」の声に一気に背筋が伸びた。さらに間髪入れず、「君の入試の成績が凄く良かったので、是非うちにきてください。何も心配することはない。必ず君を立派な研究者に育てますから。」この電話の直後、自分の気持ちは固まったと同時に、研究者への扉が開いた。即座に両親にも説明して銀行の就職内定も辞退した。

その後の研究生活では色々悩むこともあったが、その時々古賀先生の助言は大変参考になり、今も研究者としての生活の土台となっている。就職してからは面と向かってアドバイスを請うことも少なくなったが、もっと色々とお話を聞きたかった、聞けば良かったというのが正直な気持ちである。

自分の研究者人生に多大な影響を与えて下さった古賀先生のご恩は今後も決して忘れることはできない。先生の研究者としての矜持を継承することをお誓いし、ご冥福をお祈りするばかりである。

古賀 智敏先生を偲んで

島永 和幸 (国際会計研究学会理事・神戸学院大学)

2025年5月5日に、古賀智敏先生がご逝去された。突然の訃報に驚くとともに、ご生前に賜った格別のご厚情を思い、深い感謝の念を抱くとともに、悲しみを深めている。享年は、古賀先生の恩師である故武田隆二先生と同じ77歳であった。

2024年12月、古賀先生の本務校に近い金沢(於:KKRホテル金沢)で開催された研究会において、古賀先生は人的資本会計に関する非常に貴重な示唆に富む研究成果をご報告された。さらに、2025年3月、別の学会の西日本部会において、古賀先生の基調講演を拝聴させていただいた。それが古賀先生を拝見した最後の英姿であった。

国際会計研究学会第42回研究大会では、古賀先生に特別講演を依頼し、ご快諾を得ていた。しかしながら、2025年4月、古賀先生から一本の電話がかかってきた。先生曰く、「特別講演の件だけど、体調がすぐれないので辞退させていただけないだろうか。」というもので、「島永君のお願いだから断るのはとても心苦しく何とか避けられるようにしたかったが、大変申し訳ない。」というものであった。今思えば、古賀先生の中を察するに、心が締め付けられる思いである。

古賀先生が第11代会長として在任中、2012年に韓国国際会計学会(KIAA)との間で国際学術交流協定(MoU)を締結され、今につづくKIAAとの相互交流の礎を築かれた。また、監査法人からの寄付をもとに国際交流基金を創設された。古賀先生は、文字通り、国際会計研究学会の国際化にご尽力された。

古賀先生の研究領域は、国際会計はもとより、財務会計、監査論、および知的資産会計など多岐

に及び、いずれも新しい未開拓の領域をフロントランナーとして切り拓いている点にその特徴がみられる。その中でも、古賀先生の研究の凄みを大学院在籍中に直接肌で感じた著作が、『価値創造の会計学』（税務経理協会、2000年）であった。本書は、「税経セミナー」で計20回連載された論文を加筆・修正されて書籍化されたものであった。連載期間中、古賀先生はオーストラリア国立大学に半年間、在外研究に行かれているが、海外からも欠かさず連載を続けられた。研究には惜しめない労力を注がれる古賀先生らしいエピソードである。本書は、「古賀会計学」のエッセンスが、あちらこちらにふんだんに盛り込まれている。古賀先生は、「テキストを出版する場合、そのテキストには筆者の独自の会計観なり、研究蓄積なりが反映されたものでなくてはならない。」と常々おっしゃられていた。本書の「序」では、本書で取り扱おうとする会計理論について、次のように述べられている。すなわち、「このような会計理論は、端的に言えば、企業のトータル・バリューの測定・伝達を図ろうとする考え方を反映するものであり、価値創造の会計理論としてそれを特徴づけることができるだろう。かかる**ストック計算を重視したバリューの視点から現代会計を体系づけようとしたこと**を、本書の第1の特徴として挙げておきたい。」（前掲書、2頁）とされる。本書は、まさに古賀会計学の神髄がつまった珠玉の一冊であり、大学院でこれから研究者を志す学生にとって必読の書としてお薦めする。

古賀先生は、2000年代に入ると知的資産会計の領域で精力的に研究活動を展開されるようになる。この頃から、ウルフ・ヨハンソン教授をはじめ、数多くの海外の著名な研究者と積極的に交流されるようになる。こうした著名な研究者との国際共同研究を通じて、海外ジャーナルにも積極的に投稿され、複数の論文がアクセプトされ、掲載に至っている。今でこそ海外ジャーナルに投稿する研究者も珍しくない。とはいえ、2000年代初頭から、古賀先生は、研究活動の面でも独自の人脈でグローバルに展開された卓越した研究者でもあった。こうしたグローバル指向の研究スタイルは、仙場胡丹教授（名古屋大学）、岡本紀明教授（立教大学）、姚俊教授（明治大学）、および島田佳憲准教授（埼玉大学）など、古賀ゼミ門下生に脈々と引き継がれている。神戸大学大学院経営学研究科の伝統ある「国際会計」分野の指導教員として、数多くの優秀な研究者を輩出されたことも古賀先生の大きな功績の1つである。

衷心より、古賀智敏先生のご冥福をお祈りいたします。